

令和8年 カンボジアスタディツアー

私は2026年の春、認定 NPO 法人 CFF ジャパンが実施するカンボジアスタディツアーに参加し、現地で歴史や社会課題について触れ、人々と交流する中で、日本では知ることのできなかった現実を目の当たりにしました。実際に見て、聞いて、感じた経験は、私に多くの気づきと、今も考え続けている沢山の問いを残してくれました。

1. トゥールスレン虐殺博物館・ゴミ集積場

トゥールスレン虐殺博物館では、今まで知らなかったカンボジアの歴史について学びました。実際にその場所に行ってみると、遠い国で起きた昔の出来事というより、そこで実際に生きていた人たちのこととして感じました。ゴミ集積場では、今まで自分が知らなかった環境や人々の暮らしを実際に見ることができました。そこで初めて知ることも多く、今まで何も知らなかった自分にも気づきました。そして、知っただけで何もできない自分が悔しく感じました。それでも、知らないままではないのではなく、知ったからこそ「自分はこれからどうするべきか」と考え続けることが大切なのかなと思いました。

2. 子どもたちとの交流

現地の子どもたちと一緒に遊んだり、活動したりする中で、言語や文化が違っていても、笑ったり楽しんだりする気持ちは同じなのだと感じました。最初は「子どもたちに何かしてあげたい」という気持ちもありましたが、実際に関わってみると、私たちが与えたものよりも、子どもたちから受け取ったものの方がずっと多かったように感じました。また、子どもが健全に過ごすためには、食事や住む場所、教育などの「見えるもの」だけでなく、愛情や安心できる居場所、誰かに大切にされていると感じることなどの「見えないもの」も必要なのだと考えるようになりました。子どもたちとの交流を通して、幸せや豊かさとは何なのかを改めて考えるきっかけになりました。



3. シェアリングを通して

ツアー中のシェアリングでは、同じ場所で同じ経験をしていても、一人ひとり感じたことや考えたことは違うのだと実感しました。仲間のお話を聞くことで、自分にはなかった視点に出会い、今まで当たり前だと思っていたことを何度も見つめ直すことができました。楽しかったことだけでなく、悔しさや無力さ、どうすればいいのかわからないという気持ちにも向き合いました。答えを出すことが大切なのではなく、答えが出ないからこそ考え続けることにも意味があるのだと思いました。このツアーで生まれた「自分には何ができるのか」という問いを、これからも自分の中に持ち続けたいです。

